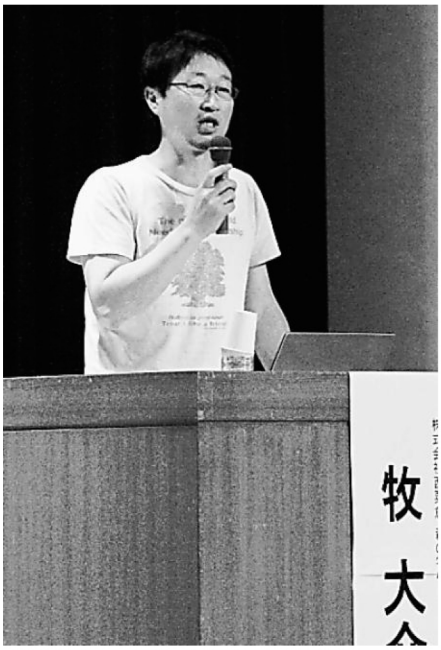
長崎大学 リレー講座 要旨 〈4〉

# 林業の6次産業化着手

## ローカルベンチャーが地域を変える

「西粟倉・森の学校」代表取締役校長

牧（まき） 大介（だいすけ）氏




私が活動する西粟倉村は岡山県の北東にある人口約1500人の村。2004年に平成の大合併を拒み、独立して生きることを決めた。そして、この10年で移住者が人口の1割程度を占めるようになった。新しく立ち上がった会社が12社以上あり、売上高の合計も7億円を超え、雇用も少なくとも70人は増えている。

地域の可能性を掘り起こし、価値に変え、雇用形態に結び付ける人材の存在が、地方創生では欠かせない。現場で一生懸命やる人が出て初めて、地域を変える試みが動き始める。

ところが多くの場合、計画をつくることに追われ、実行に結び付かない。時間をかけて立派な計画をつくったところで、その間に環境はどんどん変化する。そもそも計画通りにいくはずがないのに、計画に縛られ、計画通りにやろうとする。これでは、優秀な行政マンの時間を浪費するだけだ。

合意形成にも時間をかけすぎている。今ある社会構造を変革しようとすると、初期には多くの人の理解を得られにくかったりする。みんなで話し合って合意形成しようとしてもなかなかうまくいかない。前例主義も障害の一つ。過去の積み重ねが今の停滞の原因なのに、失敗を恐れるあまり、過去にやってきた事例や方法にとらわれる。これでは新しい価値を生みだすことはできない。

きっかけとなったのは、当時、森林組合に勤めていた國里哲也さん。仲間を集めて起業し、今でいう林業の6次産業化に着手した。この動きをきっかけに、村全体がチームとして発展していくためのビジョンやコンセプトを文書化し、「一〇〇年の森構想」として発信することを始めた。このプロセスで、村は具体的なアクションを先行させ、既成事実となったものを政策的に文書化して、予算化していくという柔軟な対応をした。

一つの事業を大きくするほど、大企業や大都市との戦いになる。それよりも、個性的で小回りの利く小さな会社や事業の集合体として地域全体を形づくり、地域の可能性を掘り起こしていくというのが西粟倉村の産業政策、経済振興の基本的な考え方だ。こうして生まれるローカルベンチャーが集積することで、起業家を育成する土壌が育ち、新しい事業が芽生えるという好循環が生まれている。

多種多様なチャレンジが生まれる可能性は日本のどの地域も持っている。その可能性を生かすための実践力が求められている。